

タイトル	アトラ・ハシース叙事詩(Atra-hasis)(2)
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，44：29-56
発行日	2009-11-30

アトラ・ハシース叙事詩 (Atra-hasis) (2)

桑 原 俊 一

キーワード：古代メソポタミアの神話，アトラ・ハシース叙事詩，人間の創造神話，洪水神話

本稿はアトラ・ハシース叙事詩の翻訳と脚注を施こした続稿である。承前において使用した主たるテキスト記号やその他の記号はそれを踏襲する。各行の通し番号は前稿を引き継ぐことにするが、それに続く本稿の始めの部分はテキストの重複と断片的にすぎることもあり、訳出を控えた。

イギギたちは過重な労働に耐え難くなったため、エンリルに反旗を翻す。エンリルは彼らの謀反に対し、知恵の神エンリルが登場し、その解決策が図られる。本稿ではこの部分のテキストから始める。解決策として人間が創造されることになる。神々の世界に人間が関与することになった。それはひとえにイギギの苦役や労苦を人間に肩代わりさせることに他ならなかったのである。メソポタミアの文学には関連するモチーフがしばしば登場する。必ずしも苦役や過重な労働ばかりでなく、冥界に下ったイナンナ／イシュタルが冥界から解放されるときにはそれに代わる代理者を留め置かなければならなかったし、帝国の危機に際し、一時的に代理の王を玉座につけることもあった。したがってこの書板に出てくる人間創造の代理者性はメソポタミア文学や文化にしばしば登場するモチーフと脈絡を一にするといえよう。なお、テキストについては E MB92608 と Aiv-Aviii を本稿文末に添付した。

- 2 189 wašbat 𐎶Bēlet-ili šassūru¹
ベーレット・イリー²、誕生の女神は坐している。
- 3 190 šassūru lididia³ libnima
誕生の女神を降し、造りださせよう。
- 4 191 šupšik DINGIR⁴ awilum lišši
そして人間に神々の苦役を負わせよう。
- 5 192 iltam issū išālū
彼らは女神を呼び寄せて、訊ねた。
- 6 193 tabsūt ili erštam 𐎶Mami
神々の産婆、聡明なマミに。
- 7 194 attima šassūru
「あなたは誕生女神、
- 8 baniāt awilūti
人間の創造女神（だ）。
- 9 195 banima lulla libil abšānam
原初の人間を創造して下さい。彼は軛を負うことだろう。
- 10 196 abšānam libil šipir 𐎶Enlil
彼に軛を負わせよう。エンリルの働きを。

1 シュメール語 ŠA・TÛR からの借用語。

2 基本的には豊饒女神である。母なる女神の一つの神であり、ベーレット・イリーは「神々の婦人」を意味する。歴史時代以降になると母なる女神や誕生の女神が神々とのペアーとの関係にあることから推測できるように明確な名称を伴って登場する。メソポタミアには、マミ (Mami, Mamma, Mama) 「母」、ディンギルマハ (Dingirmah) 「高貴な(女)神」、ニンマハ (Ninmah) 「高貴な婦人」、ニントゥ (Nintu) 「誕生の婦人」といった女神たちが登場する。アトラー・ハシースにも人間の創造に関与する女神として出てくる。

3 Lambert/Millard は li-gim?-ma? と取る。意味は「子孫」。

4 ili と読む。

- 11 197 šipšik ilūm awilum lišši
人間に神々の重労働を負わせよう。」
- 12 198 𒀭Nintu piaša tēpšamma
ニントゥは口を開いて、
- 13 199 izzakar ana DINGIR • MEŠ rabūti
言った。偉大なる神々に。
- 14 200 ittijame la naṭū ana epēši
「わたしが造るには相応しくございません。
- 15 201 itti 𒀭Enkima ibašši šipru
その働きはただエンキのものです。
- 16 202 šūma ullad kalama
彼は全てのものを清くいたします。
- 17 203 ṭiddam liddinama anaku lupuš
彼がわたしに粘土をお渡し下さったら、わたしは(それ)
を造りましょう。」
- 18 204 𒀭Enki piašu ipušamma
エンキは口を開いて
- 19 205 izzakar ana DINGIR • MEŠ rabūti
言った。偉大なる神々に。
- 20 206 ina arhi sebuti u šapatti
「月の第1と第7そして第15の日に、
- 21 207 tēliltam lušašikin rimka
わたしは清め、つまり沐浴の儀式を執り行ないましょう。
- 22 208 DINGIR išten liṭbūhuma
一柱の神を屠らせましょう。
- 23 209 litellilū DINGIR • MEŠ ina ṭibi⁵

5 この行からテキストは Aiv 40-50 (Eiii 33 まで) と並行する。Lambert/
Millard: itibu は「浸すこと」と取る。Cf. マリにおける浸礼儀式を参照のこと。

(そうすれば)神々は浸礼によって浄められるでしょう。

24 210 ina širišu u damišu

彼(一柱の神)の肉と血で

25 211 ^aNintu libaliil ṭidda

ニントゥに粘土と混ぜ合わせましょう。

26 212 DINNGIR-ma u awilum

(こうして)神と人間は、

27 213 libtallu puhur ina ṭiddi

混ぜ合わされましょう。粘土と共に。

28 214 ahriatiš ūmi uppa i nišme

絶えることなくわれらは太鼓の音⁶を聞きましょうぞ。

29 215 ina šir ili eṭemmu libiši

神の肉から死霊⁷を現れ出させよう。

30 216 baḷṭa ittašu lišēdišuma

それ(太鼓の音)は生きているしるしとして生き物に知らされよう。

31 217 aššu la mušši eṭemmu

決して忘れ去られることのないように死霊を現わしめよう。」

32 218 [ina puh⁸ri] iplū anna

6 シュメール語 ÛB アッカド語 uppu ここでは「心臓の鼓動」を意味する。215-216行を参照。

7 シュメール語 GIDIM, アッカド語 eṭemmu はメソポタミアに固有な概念である。死者の霊を意味するが、形相をもつもので、献水や供物を受ける。「家族の死霊」,「彷徨する死霊」,「(冥界から)死霊を甦らす」,「死霊による誓い」といった表現を取って出てくる。したがって所謂幽霊のような存在とは異なる。

8 ūh 

[集会で、] 彼らは答えた。『その通りだ』と。

- 33 219 rabûtum ^dAnunna
偉大なアヌンアキ、
- Aiv 51 220 pāqidû šīmāti
運命を割り当てし者。
- 52 221 ina arhi sebuti šapatti
月の第 1 と第 7 そして第 15 の日に、
- 53 222 teliltam ušaškin rimka
彼は浄めの沐浴を整えた。
- 54 223 Ilawela⁹ ša iṣû tēma
イラウエラ、知性に長ける者、
- 55 224 ina puhrišunu iṭṭabhū
彼らは彼らの集会で屠った。
- 56 225 ina širiū u damišu
彼らの肉と血に
- 57 226 ^dNintu ubalil ṭiṭṭa
ニントゥは粘土を混ぜた。
- 58 227 ahria[tišu ūmi uppa iṣmû]
絶えることなく、彼らは [太鼓の音を聞いた。]
- Av 1 228 ina šir ili eṭ [emmu ibši]
神々の肉から [死霊が現れた。]
- 2 229 talṭa ittašu uṣē[dišuma]
それ(太鼓の音)は生きているしるしとして生き物に[知
らされた。]
- 3 230 aššu la mušši eṭemmu [ibši]
決して忘れされることのないために死霊が [現れた。]

9 この文字の読みが確定する以前は ^dGestu'e, ^dWe-ila, ^dIlu-awilu などと読まれていた。

- 4 231 ištuma iblula ʔiṭṭa šāti
彼女（ニントゥ）がその粘土を混ぜ合せた後で、
- 5 232 issi ʔAnunna ili rabūti
彼女は招集した。アヌンナキ、偉大な神々を。
- 6 233 ʔIgigi ilū rabūtim
イギギ、偉大なる神々は、
- 7 234 ruʔtam iddū elu ʔiṭṭi
粘土に唾を吐きかけた。
- 8 235 ʔMami pīaša tēpušamma
マミは口を開いて、
- 9 236 izzakar ana ili rabūti
言った。偉大なる神々に、
- 10 237 šipra taqbianimma
「あなた方はわたしに仕事をお命じになった。
- 11 238 ušakilil
わたしは（それ）を完成した。
- 12 239 ilam taṭbuh qadu ṭemišu
あなた方は一柱の神の理解力もろとも彼を屠った。
- 13 240 kabtam dullakunu ušassik
わたしはあなた方の苦役を取り除いた。
- 14 241 šupšikkakunu awīlam ēmid¹⁰
わたしはあなた方の重労働を人間に負わせた。
- 15 242 taštahada rigma ana awūlūti
あなた方は喧騒を人間に授けた。
- 16 243 apṭur ulla¹¹ andurara aškun

10 241 行から 260 行はテキスト P による復元が多い。

11 語彙集 Proto-Ea=naqbu 634f. 参照。

UL=ullu ša kalbi.

わたしは軛を弛め、自由を確立した。」

17 244 iṣūma anniam qabāša

彼らは彼女のこゝばを聞いた。

18 245 iddarrūma unaššiqu šēpiša

彼らは自由になり、彼女の足に接吻した。

19 246 panami 𐎶Mami nišassiki

「かつてわたしたちはあなたをマミと呼びました (が),

20 247 inanna bētet kalā ilī

21 248 lū šumki

今や、あなたの名は (248) すべての神々の女王であられましよう (247)。」

22 249 itērbu ana bīt šimuti

23 250 niššiku 𐎶Ea erištu 𐎶Mami

思慮深いエアと賢明なマミは (250)

運命の部屋に入った (249)。

Av 24 251 「ša []

P 13 [ša]ssūrātum puhhurāma

誕生の女神たちが集まった。

14 252 𐎶iṭṭa ikabbasam mahariša

彼 (エア) は彼女 (マミ) の面前で粘土¹² を踏みつけた。

15 253 ši šipta ittanandi

彼女は呪文を唱え続けた。

16 254 ušamnaši 𐎶Ea ašib mahriša

エアは彼女を前にし彼女に (それ) を唱えさせた。

17 255 ištuma igmuru šipassa

12 煉瓦作りの経緯が叙述される。呪詛文書「When Anu created heaven」によれば、煉瓦神クッラ (Kulla) が目的のため粘土を千切るエンキにより創造された。Dally の脚注 14 を参照。

彼女は呪文を終えると、

18 256 kerši 14 uktarriş

彼女は(粘土から)14個を千切り取った¹³。

19 257 7 kerši ana imitti

7個を右に、

20 258 7 kerši ana šumeli iškun

7個を左に置いた。

21 259 ina birišunu ittadi libbiti

それらの間に煉瓦¹⁴を据えた。

22 260 [] xx abunnati u[š] x (x)

13 粘土と人間創造を関係づける物語に「エンキとニンマハ」と名称されるシュメール語で書かれた創造神話がある。150行ほどの比較的短い物語であり、アトラ・ハシース叙事詩の存在を前提にしていたと思われる(おそらく前1500年ごろの作品)。この神話については本稿と関連する部分に留める。母なる女神ナンムはアプスーに眠るエンキを起床させて人間を創造すべきことを告げる。任務はエンキによってナンムに委ねられる。エンキの指示は、エンキの住まいが置かれるアプスーの肥沃な粘土を取り、それを千切り、形を整え人間を創造すること、であった。人間創造の理由はほぼアトラハ・ハシスを上書きしたと思われる。つまり下級の神々の労役を彼らから解放するためである。神々の代理者として人間が造られる。この神話の詳細については拙論「創世神話の系譜——古代メソポタミアの資料から——」『北海学園大学人文論集』39号、(2008年)176-183頁を参照。

14 泥煉瓦(煉瓦)は人間の創造能力の原型を象徴すると思われる。母なる女神パーレット・イリーの別名の一つは「ラピス・ラズリ煉瓦」である。初期王朝時代に使用された丸パン形した‘平凸’煉瓦は妊婦のお腹の膨らみ具合によく似ているし、実際適当な形でなくても建造物に広く使用された。Lambert/millardは出産時の椅子として使用された煉瓦構造を意図しているが、それを支持する証拠は何一つとしてない。Dallyによる脚注15は説得力がある。呪詛と儀礼が問題になるが、出産儀礼についての詳細については知られていない。注23を参照。

主要校訂本は大幅に欠損しているが、アッシリア校訂本によって補完することができる¹⁵。

- 7 彼女は葦を使って（それ）を開き臍の緒を切った。
 8 賢明にして聡明な、
 9 7 と 7¹⁶ の誕生の女神たちが集合した。
 7（女神）は男を産み、
 10 [7]（女神）は女を産んだ。
 11 誕生の女神たちにとっては運命創造者である。
 12 彼は彼らを一対にして []。
 13 [] は彼らを彼女の前で一対にして [],
 14 マミは（これらの）きまりを人類のために考案したのだ¹⁷。
 15 「産褥にある誕生の婦人の部屋に、
 煉瓦は7日間寝かせておかねばならない。
 16 賢明なマミ、ベーレット・イリーは敬意を払われよう。
 17 産婆は誕生の婦人の部屋で喜ぼう。
 18 そして妊婦が赤子を産み落としたとき、
 19 赤子の母親は自ら離れなければならない。
 20 娘に対して男は []。

Eiv 1 271 []

15 Lambert/Millard, K3399+3934 (S), Obverse iii, 60.

ただし重複部分は省略した。

16 14 柱の女神を意味する。

17 C. Wilcke, 'Familiengründung im Alten Babylonien' in *Geschlechtsreife und Legitimation zur Zeugung*, (ed.) J. Martin und Th. Nipperdey, *Historische Anthropologie 3, Kindheit, Jugend, Familie 1* (Friburg/München, 1985) による復元に基づく。

- 2 272 [] irtīša
[] 彼女の乳房
- 3 273 [] ziqnu
[] パン
- 4 274 [] lēt eṭ¹⁸li
[] 若者の頬に
- 5 275 [ina nā]rāti šiuli
[川] と通りで
- 6 276 [ih]itirū aššatum u mussa
妻と夫は互いに求 [愛する]。」
- 7 277 šassūrātum puhhurāma
誕生の女神たちが集められた。
- 8 278 wašbat ^dNintu
ニントゥは座っていた。
- 9 279 immanu arhi
彼らは月々を数え、
- 10 280 [ina bit] šimati issû ešra arha¹⁹
運命の [部屋で] 10ヶ月目を呼び上げた。
- 11 281 [ešru] arhu illikamma²⁰
10ヶ月がやってきた。
- 12 282 iqlup palê silitam iptē²¹

18 it 

19 以下Aが主要なテキストであるが280行から300行についてはEを基本にした。その理由はEテキストの保存状態がAより概ね良好であることによる。

20 Avi 1 eš-ru ITI il-li-[ka]-am-ma

21 Avi 2 [] up pa-le-e si-li-tam ip-tem

Lambert/Millard は前半部分を [ha]-lu-up pa-le-e 「期間の経過」と読む。

彼女は枝²² を切り取り、子宮を開いた。

13 283 namuruma hadû panuša

彼女の顔は輝き、喜びで満ちていた。

14 284 i'pur kaqqassa

彼女は被り物で頭を覆った。

15 285 šabsūtam ipuš

彼女は産婆の術を施した。

16 286 qablīša itezeh

彼女は腰を締めて、

17 287 ikarrab

祝福した。

18 288 iṣir qēma²³ libitta iddi

彼女は(麦)粉の中に(環)を描き、煉瓦を置いた。

19 289 anākumi abni ipuša qātaja

「わたしが(それ)を創造し、わたしの手が(それ)を造った。

20 290 tabsūtum ina bīt qadišti lihdu

産婆はカディシュトゥ女祭司²⁴の家で歓喜しよう。

22 月が満ちた期間の表象として用いられている。

23 穀類を挽いた粉一般を意味するがここでは麦粉とした。何を叙述しているのか、どんな儀礼行為なのかこの文脈から把握することは困難である。メソポタミアの場合、日常は儀礼に始まり儀礼に終わることが常であったことと、儀礼が厳格に保持され長期にわたって継承されてきたことが分かっている。したがって出産の儀礼も厳密に執り行われていたと推測できるが、残念ながら出産儀礼に関する資料が残存せず、詳細については不明である。

24 qadistu-女祭司は役割も様々であったようである。ここでは産婆との関係が明らかであるが、シュメール語テキストでは多産や子どもの誕生に関係づけられ出てくる。子どもを持つことは許されていた。同じ女祭司にあっても、naditu-女祭司は子どもを持つことができなかった。

- 21 291 ali āllitum ulladuma
妊婦が出産するところでは、
- 22 292 ummi šerri
子の母は
- 22 293 u'arru²⁵ ramanša
自ら分娩し、
- 23 294 9 ūmi linnadi libittum
7 日あいだ煉瓦は置かれよう。
- 24 295 ituktabit ^dNintu sassūru
ニントゥ、誕生の女神、は敬意を払われよう。
- 25 296 ^dMami ahassunu²⁶ i tabbi
彼女は彼女たちの妹をマミと呼ぶことでしょう。
- 26 297 i ta[- s]assura²⁷
彼女は誕生女神を […] し、
- 26 298 ittadi kitam
彼女は葦の筵 (?)²⁸ を据えるでしょう。
- 27 299 ina [] nadê erši
彼らの [] 部屋に寝台が整えられると、
- Avi 20 300 lihtir aššatum u mussa
妻と夫は互いに求愛しよう²⁹。
- 21 301 inuma aššūti u mutūti

25 Lambert/Millard は haru 読む。

26 欠字であるが、a]-h-ha-šu-nu と読むことは可能である。

27 Avi 18 i ta [- s]a-as-su-ra. Lambert/Millard は i-t[a-ad s]a-as-as-ra と読むが、文字の確認は困難である。

28 Dally は「亜麻布」と訳出する。Lambert/Millard は Keša (Kesh) と読む。

29 Lambert/Millard は li-[i']-ti-[lu aš-š] a-tum u musa と読むけれども、この行の 2 文字目は [i'] と読むことは不可能である。

妻と夫の關係に

22 302 ina bīt []e? i tahdu Ištar

[]³⁰の家ではイシュタルは歡喜しよう。

23 303 9 ūmi liššakin hidūtum

(そこで)³¹ 9日のあいだ祝宴が設けられよう。

24 304 Ištar lišappu ^dIšhara

彼らにイシュタルをイシュハラ³² (愛人) と声高に呼ばせよう。

25 305 ina [] simānu šimti

[15日に?] 運命の定めの時,

26 306 [attune ta]bianim

[あなたは] 私に名前をつけた。

27 307 []

[]。

以下およそ 328 行までテキストは欠損する。

48 328 awīlum []

人 []

49 329 zukkī muša[bu]

住まいを浄 [め,]

50 330 māru ana abišu]

息子は彼の父に []

30 Lambert/Millard は [舅] を補う。

31 302 行目における Lambert/Millard 読みが正しいとすれば、舅の家を想定されよう。

32 元来シュメールの神々よりはセム系の神々の系譜に近い女神である。したがってメソポタミア中流域で崇拝され、愛の女神としてイシュタルと等位された。See, J. Black and A. Green, *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia*, University of Texas Press, Austin, 1997, 110.

- 51 331 []
[]
- 52 332 ittašbūma []
彼らは座し, []
- 53 333 šū naši []
彼は運んでいた。[]
- Avii 1 334 imurma []
彼は見て, []
- 2 335 ^dEnlil []
エンリルは []
- 3 336 itāhzū laqati []
彼らは [] を掴み, []
- 4 337 allī marri ibnû eššūti³³
彼らは鍬と鋤を新しくし,
- 5 338 ikī ibnû rabûtim
彼らは大運河を造った。
- 6 339 bubūtiš niši titiṣ [ili]
人々の飢餓と神々の食糧のために。
- ここで以下テキストは 340 行から 13 行にわたってほぼ欠損している。
- 19 352 [ul illikma 600] • 600 šanātum³⁴
いまだ 1200 年も [経っていなかった。]
- 20 353 [mātum irtapiš] nišu imtidā
[国土は広がり,] 人々はあまりにも夥しく増えた。
- 21 354 mā [tum kīma lī] išappu

33 Lambert/Millard はこの行の文末語を eš-[re]-ti (諸神殿) と読む。

34 バビロニアの数は 60 進法を取っていたため, 600 は大きな数を示す。これを重ねることで時が長期間経過したことを強調した。なお, 352-359 行は欠損・欠字が多く第 2 の書板 1-8 行からの復元である。

国 [土は牡牛のように] 騒々しくなった。

22 355 ina [hubūrišina] ilu ittadar

神は [彼らの大騒ぎ] で (睡眠を) 乱された。

23 356 [^dEnlil išteme] rigimšin³⁵

[エンリルは彼らの喧騒を] 聞いた。

24 357 [izzakar a]na ilī rabūtim

彼は大きいなる神々に [言った。]

25 358 [iktabta] rigim awilūti

「人類の喧騒が [あまりにも大きくなった。]

26 359 [ina hubūriši]na uzamma šitta

[彼らの大騒ぎで,] 睡眠を奪われている。

27 360 [qibiama šur]uppu libši

[ご命令下さい。シュルツ]プ-病³⁶ が発生しますように。

以下 3 行欠損。

31 364 u šū [¹Atram-hasis]

しかし, 彼, [アトラ・ハシース] がいた。

35 hubūru (大騒ぎ) と rigmu (喧騒) は類似語を施した修辞法。メソポタミア文学は古典ギリシア語におけるような手の込んだ修辞法はみあたらない。総じて言えることは、セム語全体に言えることでもあるが、いわゆる対句法 (Parallelismus Membrorum) が随所に見られる。思想単位として反復することもある。クラシック音楽に施されるテーマに類似しているとも言える。この対句法は本稿で取り扱うテキストにおいてもしばしば看守できる。単位がほぼそのまま反復される場合もあれば、所与の文言を、帰結の文言として叙述する場合もある。これに加えよく用いられる修辞法は類似語や反意語を用いながら背後にあって描出する部分を強固に支持する場合である。ṭemu 「知性」と eṭemmu 「死霊」は音韻的修辞法でありながら、この場合、人間の本质を描出する部分であるため、単純な反意語と言い難い。メソポタミア人の思维して「人間とは何か」に対する応答を反意語を用いて強調文にしたて上げたと考えられよう (206-237 行) 本稿脚注 7 を参照。

36 悪寒の症状を伴う風邪のような病気か。

- 32 365 ilšu ^dEnki uzunnšu petiāt
彼の神はエンキであった。彼の耳は開かれていた³⁷。
- 33 366 itam itti ilišu
彼は彼の神（エンキ）と話した。
- 34 367 u šū ilšu itt[išu itam]
そして彼の神は彼と話すことになろう。
- 35 368 ¹Atram-hasīs piašu ipšamma
アトラ・ハシースは口を開いた。
- 36 369 izzakar ana bēlišu
彼の主に言った。
- 37 370 adi matima []
どれほど長く [神々は私たちに苦しめるのでしょうか。]³⁸
- 38 371 murša immidūniati a[na ari]³⁹
彼らは私たちを「限りなく」病を負わせるのでしょうか。
- 39 372 ^dEnki piašu ipšamma
エンキは口を開いていった。
- 40 373 izzakar ana ardišu
彼は彼のしもべに言った。
- 41 374 šibūti sillūnni ibbi
「長老たち、(つまり) 古参の者たちを招集せよ。
- 42 375 [] nia qirib bītiška
お前の家で [騒ぎ]⁴⁰を始めよ。

37 「彼」はアトラ・ハシースである。エンキのことばに耳を傾けることになる。

38 Dally に従った補充訳。

39 テキストの読みは Lambert/Millard による。

40 Dally による補充訳。

- 43 376 qerbāmi⁴¹ lissû nāgirû
近くに来て、伝令たちに伝えさせよ。
- 44 377 rigma lišēppû ina mātīm
彼らに国中に喧騒を起こさせよう。
- 45 378 ē taplaha ilikun
お前たちの神々⁴²を恐れてはならない。
- 46 379 ē tusallia ištarkun
お前たちの女神たちに懇願してはならない。
- 47 380 Namtara šīa bābšu
ナムタル⁴³の扉を探し求めよ。
- 48 381 bilā ēpīta ana qudmišu
彼の前に焼いたパンを持ってきなさい。
- 49 382 lillilšu maṣhatum nīqum
焼いた粉の供物は彼に届こう。
- 50 383 libāšma ina kadrê
彼はそれらの贈り物によって面目を失おう。
- 51 384 lišakkil qassu
そして彼は彼の手⁴⁴を拭い取ろう。」

41 Lambert/Millard によれば、この行の出だしは [qi-b]a-ma-mi と読まれる。訳は「…と命ぜよ、」となる。

42 Dally が脚注で指摘しているようにここでの神々はメソポタミアによく見られる家族の神・女神を指していると推定してよからう。

43 Namtar とも Namtaru とも綴られる「運命」を意味する。一般的には冥界の女王エレシキガルに使える下位の神である。『イナンナの冥界下り』を参照。ある伝承ではエンリルとエレシキガルの息子で冥界の悪霊としても出てくる。O. Edzard, 'Mesopotamien' in *Götter und Mythen im Vorderen Orient* (ed.) H. W. Haussig, Ernst Klett Verlag, Stuttgart, 1962, 108.

44 Dally によると、「彼の手」つまり「神の手」という言葉はアッカド語表現に一般的である「病気」を表すことばである。Dally の脚注 24 参照。

- 52 385 ¹Atram-hasīs ilqea tertam
アトラ・ハシースは命を受け、
- 53 386 šibūti upahher ana bābšu
長老たちを彼の門に集結させた。
- 54 387 atram-hasīs piašu ipušamma
アトラ・ハシースは口を開き、
- 55 388 izzakar ana šibūti
長老たちに言った。
- 56 389 šibūti sillunni abbi
「私は長老たち、(つまり) 古参の者たちを招集した。
- Aviii 1 390 [] nia qirib bītiška⁴⁵
お前の家で[騒ぎ]を始めよ。
- 2 391 qerbāmi lissû nāgirû
近くに来て、伝令たちに伝えさせよ。
- 3 392 rigma lišēppû ina mātīm
彼らに国中に喧騒を起こさせよう。
- 4 393 ē taplaha ilīkun
お前たちの神々を恐れてはならない。
- 5 394 ē tusallia ištarkun
お前たちの女神たちに嘆願してはならない。
- 6 395 Namtara šīa bābšu
ナムタルの扉を探し求めよ。
- 7 396 bilā ēpīta ana quḏmišu
彼の前に焼いたパンを持ってきなさい。
- 8 397 lillilšu maṣḥatum nīqum
焼いた粉の供物は彼に届こう。

45 375-384 行の繰り返しで、対句による修辞法。

- 9 398 libāšma ina kadrê
彼はそれらの贈り物によって面目を失おう。
- 10 399 lišakkil qassu
そして彼は彼の手を拭い取ろう。」
- 11 400 šibūtum išmu zikiršu
長老たちは彼のことばに耳を傾けた。
- 12 401 Namtara ina āli
ナムタルのため都市に
- 13 402 ibnû bissu
彼らは神殿を造営した。
- 14 403 iqbūma issû nāgirū
彼らは命じ、伝令たちは伝えた。
- 15 404 rigma ušēppû ina mātīm
彼らは国中に喧騒を起こした。
- 16 405 ul iplahū ilišun
彼らは彼らの神々を敬わなかった。
- 17 406 ul usellû ištāršunu
彼らは彼らの女神たちに嘆願しなかった。
- 18 407 [Namtā]ra išiu [bābšu]
彼らは [ナムタ]ルの [扉を] 探し求めた。
- 19 408 ublū epitam ana qudmīš
彼らは彼の前に焼いたパンを持ってきた。
- 20 409 illikšu maṣṣatum nīqum
焼いた粉の供物は彼に届いた。
- 21 410 ibāšma ina kadrê
彼はそれらの贈り物によって面目を失った。
- 22 411 ušakkil qassu
そして彼は彼の手を拭い取った。
- 23 412 [šuruppu itēz]ibšinati

[シュルツプ-病が] 彼らから [去った。]

24 413 [ilū ana nīqiši]na itturu

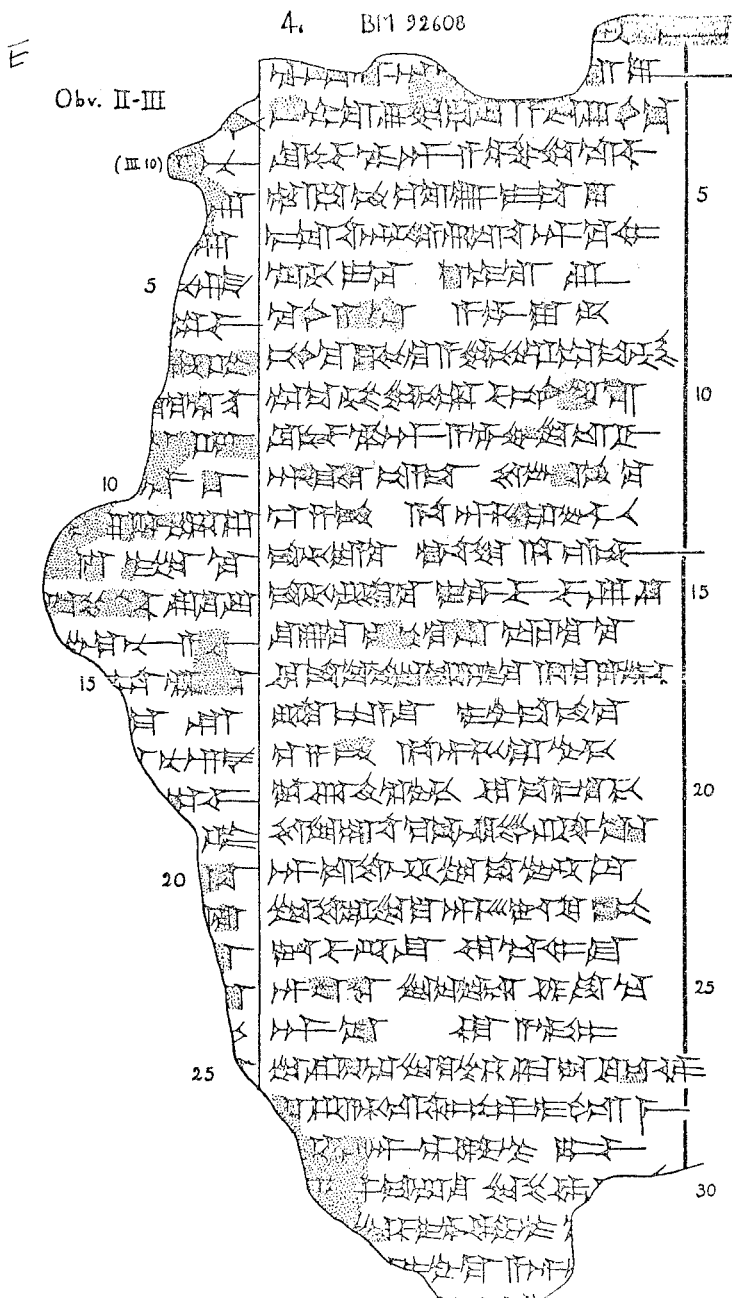
[神々は彼らの (いつもの) 供物] に戻った。

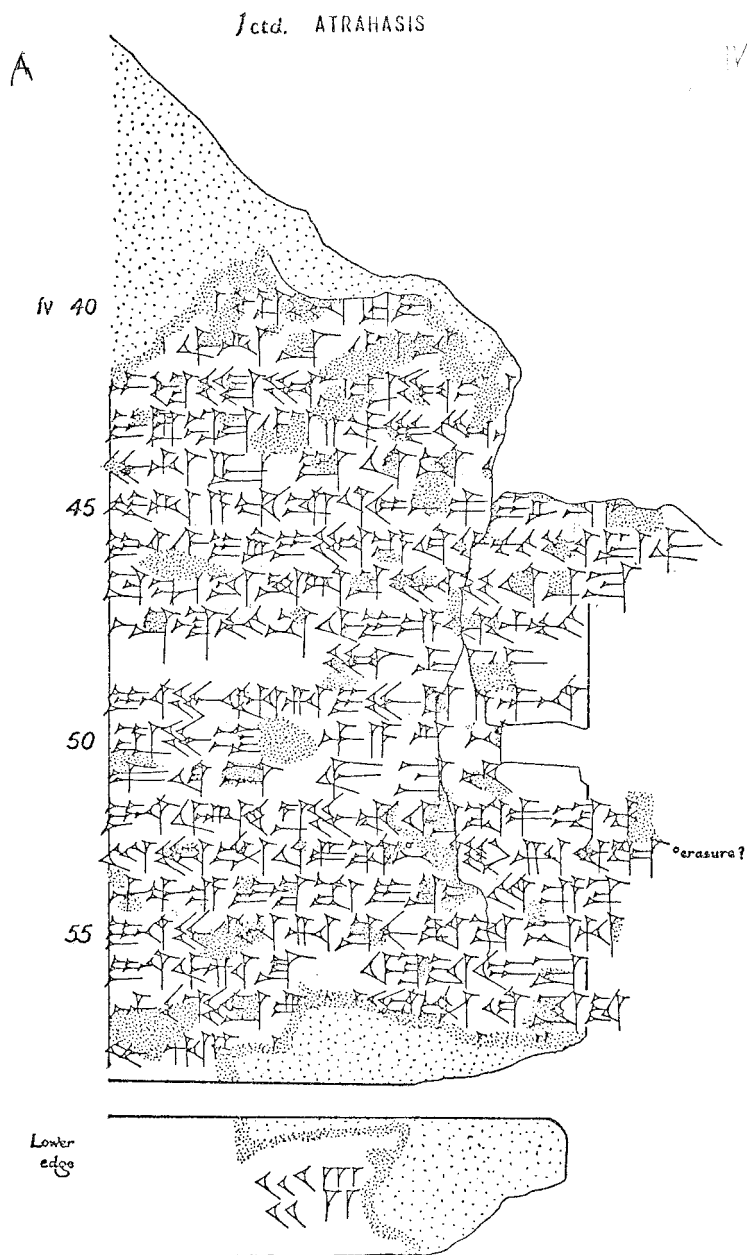
以下 2 行欠損。

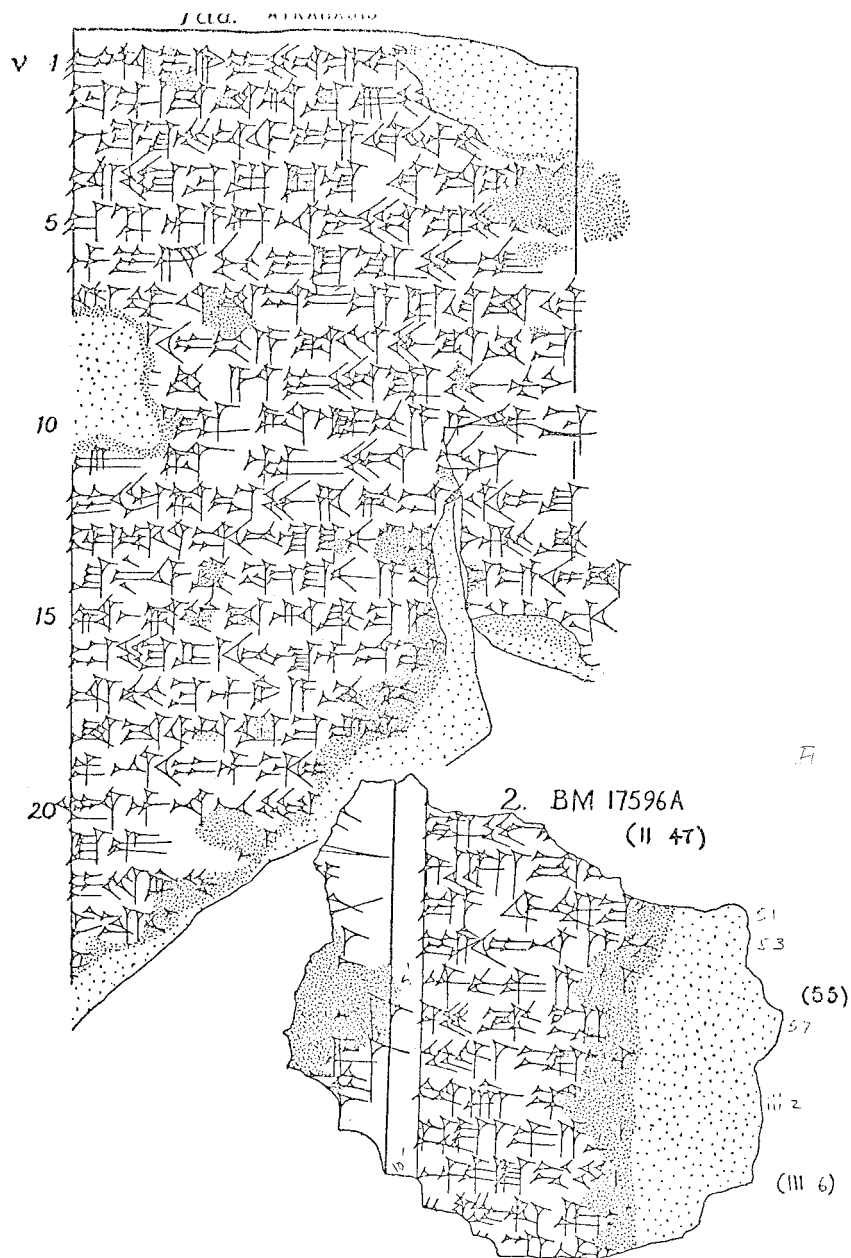
27 416 ul illikma 600 • 600 šanātum⁴⁶

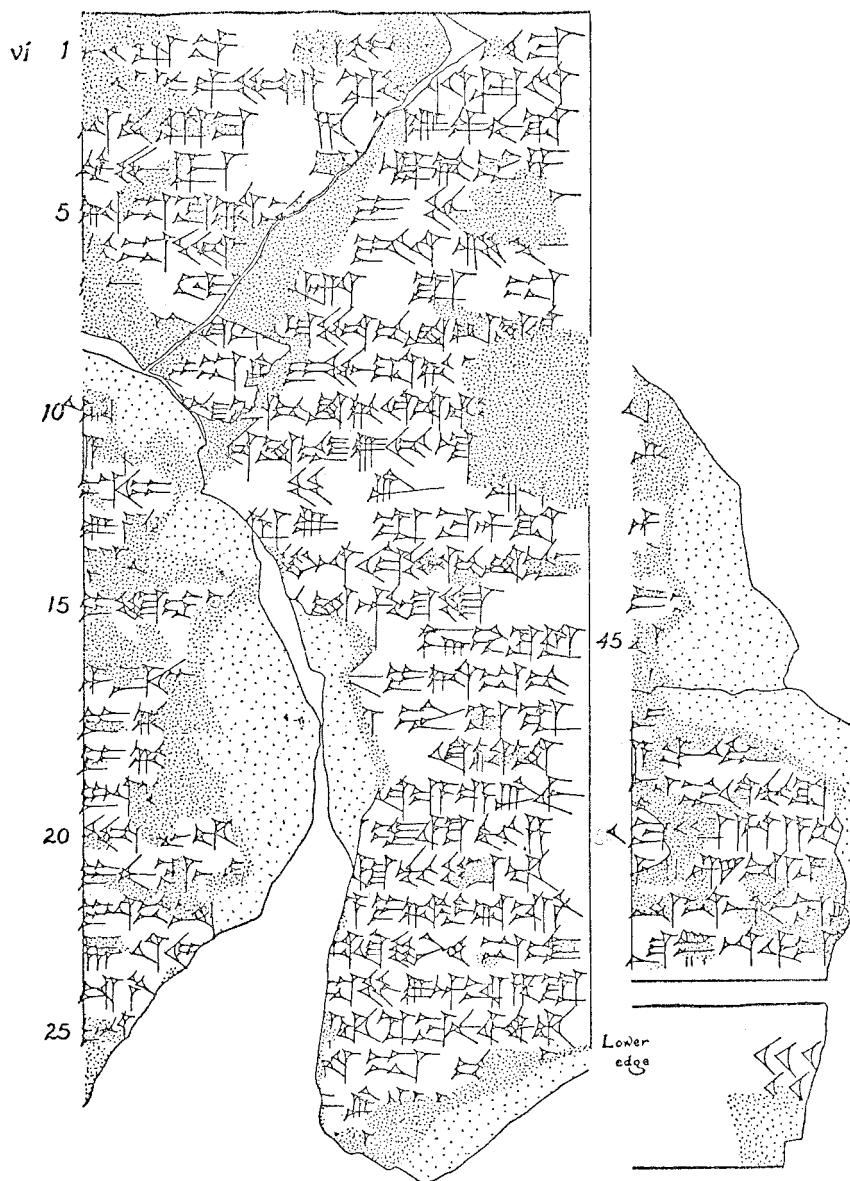
1200 年が過ぎ去った。

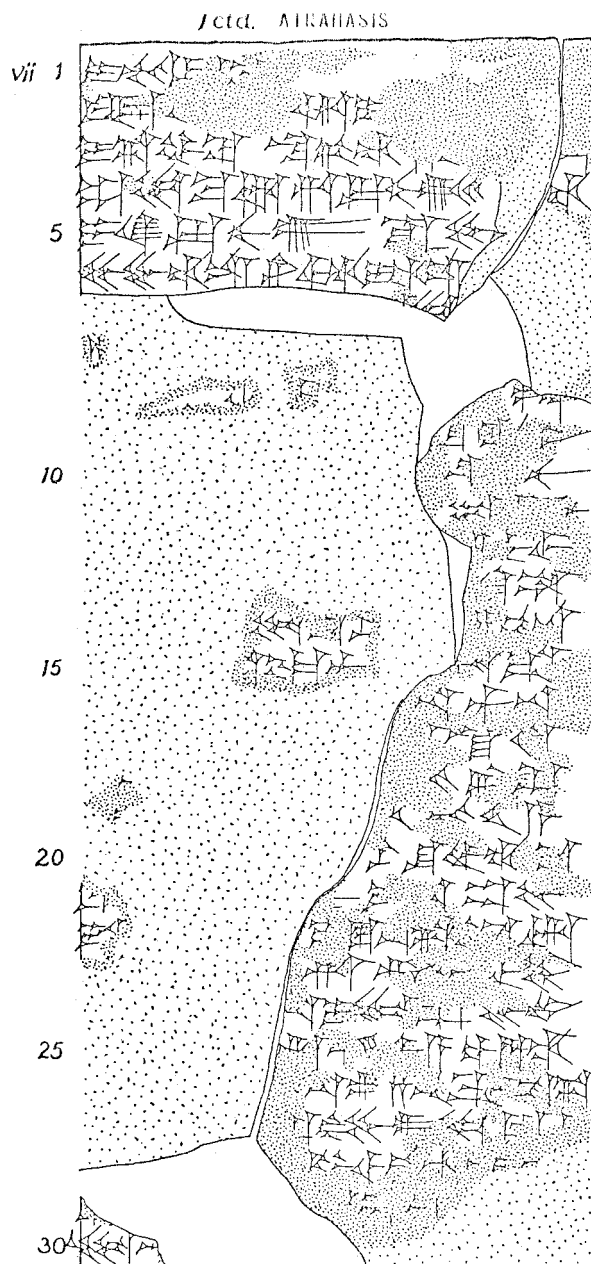
46 第 2 の書板のキャッチラインである。つまり次の書板の 1 行目で繰り返される。





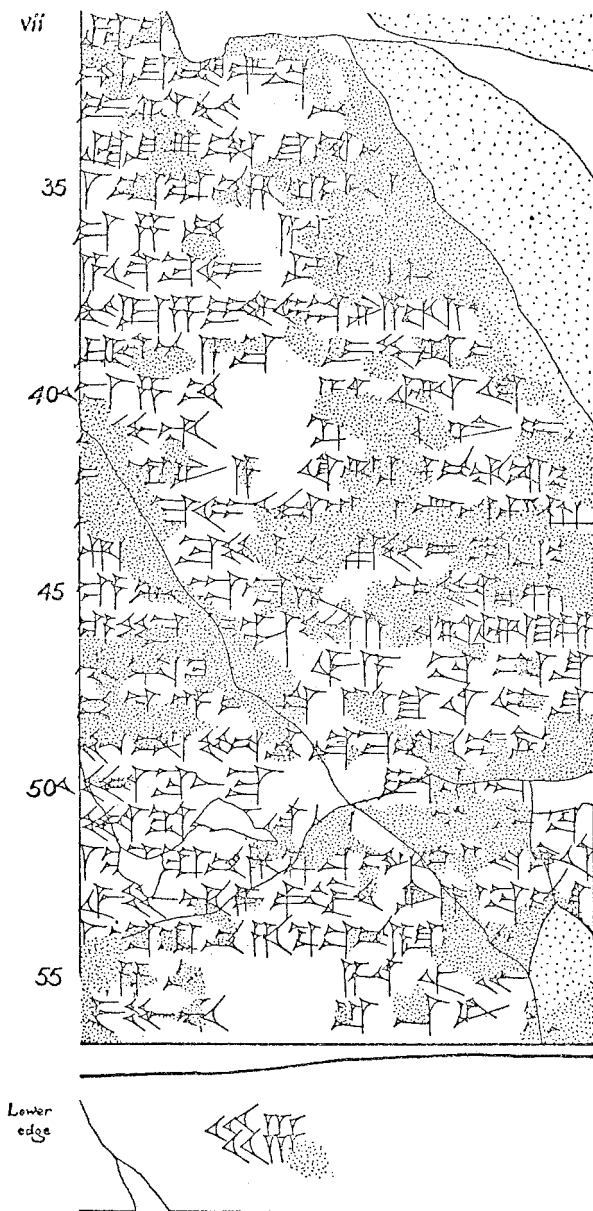






Jctd. ATRAHASIS

図版八



f ctd. ATRAHASIS

PLATE 2

viii 1

5

10

15

20

25



/ctd. ATRAHASIS

PLATE XII

viii

